

▼そして三つ目の用例として本稿の七・八句目「偏憑延喜開元曆／東北廻頭拜斗杓（偏に 延喜 元曆を 開くを憑み／東北に 頭を廻らして斗杓を拜せしを）」を挙げることが出来る。この「偏」は下の「憑」に掛かる副詞的用法とすると「ことさら、あてにしてきたが」と続く句となる。それは、直接的には七句目の「延喜と改元されて新しい時代の到来した事を」に掛かるが、内容的にはそれが八句目の「東北に頭を向けて京都の空を想い、同じ夜空に宿す、この北斗七星に心をこめて祈ったことを」を受けての「憑む」であることは自明である。ここでの道真にとつての「願望・希望」とは「延喜という改元を受けて大赦が自分にも及び、京に戻ることを許されること」であり、その「現実」は、「479 讀開元詔書」で詠じられている、「恩赦」どころか「逆賊」のレッテルまで貼られている厳しい許し難い事態であるその落差に「失望」し「無念さ」をかみしめる思いが、「偏憑」（偏に憑む）にこめられていると考えられないだろうか。

つまり、延喜の改元を受けてさまざまな思いを祈ってきた。その願いが、今全て絶たれてしまったその現実を目の当たりにした無念の心情がこの句に流れているのではないか。こう考えると五・六句中にある「根抜けたる樹」「骨傷むる魚」の暗喩を使って今の自分の事態を見つめる道真のそれと見事につながるように思う。本稿ではそうした視点に立った七、八句に「延喜」と改名されて 新しい時代の到来したことに 私は全てを託し、東北に頭を向けて はるか京都の空を想い、同じ夜空に宿す、この北斗七星に心をこめて祈ったことが、いったい何になるう。（現実には、私の望みがすべて断たれているというのに）」という解釈を「偏」の語義の考察を通して新たに提示してみた。